瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日–土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am（修道院のミサ）、9:30am

長崎のマリアさま

主任司祭　小西 広志 神父

八月九日は長崎の原爆忌です。今年で七十九年を迎えました。長崎の原子爆弾と聞くと、こころに浮かんでくるのは浦上天主堂で祈りをささげている方々の姿です。もう一つ、不思議とこころに浮かんでくるのは被昇天のマリアさまのお姿です。この二つのイメージがいつも交差します。

長崎の教会を巡って歩くと、あちこちに被昇天のマリアさまがかかげられているような気がします。数えたわけではありませんが、聖母子や無原罪のマリアさまより、被昇天のマリアさまが目につきます。そして、被爆のマリアさまを安置する小聖堂にも、被昇天のマリアさまのご像があります。それは、天にあげられるお姿を表しているようです。わたしにとって長崎と聞くと、被昇天のマリアさまを思い出さないわけにはいきません。そして、そこでお祈りしている方々の姿も思い起こされます。長崎の女性の信者さんたちは、昔ながらの白いヴェールを身につけてミサにあずかります。ヴェールの白さと被昇天のマリアさまが身につけている青いマントの色。二つの色がこころに深く残ります。

先の大戦が終わって七十九年。もう戦争の出来事を覚えている方々はずいぶんと少なくなりました。どんなに語り継いでも、戦争の悲惨さと苦しさは、新しい世代には伝わっていかないのかもしれません。しかし、原子爆弾の放つ閃光は、これまでとは違う時代の始まりを告げるものだったと思います。つまり、神さまより人の力を信じる時代、こころよりモノとお金を大切にする時代。そんな時代が始まったのです。そして、今日まで、七十九年間続いてきました。

この数年、人類は新型コロナウイルス感染症に脅え、世界各地で生じる戦いに心痛めました。そして、日本の社会は確実に変わりつつあります。わたしは、決して人に教えを説けるような立派な宗教者ではありませんが、わたしたちはこころよりもモノとお金を大切にして生きているように思えるのです。

もちろん、戦後、日本といわず世界中の人が幸せを求めて努力しました。平和を実現するために祈りかつ働いてきました。しかし、どこかで大切なものを見失ってしまったようにも思えるのです。しかし、もう一度、何を見つけだしたらよいのかは、わたしにはわかりません。変わりつつある世界に対して、おろおろと眺めているだけしかできないのかもしれません。

被昇天のマリアさまのまなざしは、上の方に向かっています。お顔も少し上の方を向いておられます。そのお姿は、人間が向かうべき目的地はこちらだ、人間にとって大切なものはこちらだと教えてくれているかのようです。天へとあげられていくマリアさまを見ながら、白いヴェールの奥で祈りをささげる長崎の信者さんたちは、本当に大切なものを見失わないで、マリアさまの見守りの中で生きていけますようにと願っているのでしょう。